

【結果および考察】 1. II級不正咬合において、I級不正咬合に比較して上唇の動きが少なかった。
2. 下唇は2, 4mm前進で移動量が大きかった。
3. 上唇の変動量は、4mm前進でI級不正咬合に近似する可能性が示唆された。以上の結果から、4mmの前進移動で上下唇の機能的な活性化が図られる可能性が示唆された。

9) 小臼歯抜去を併用したプリアジャステッドアプライアンス治療が治療後の歯列弓形態に与える影響

○三宅 弘直, 竜 立雄¹, 氷室 利彦
(奥羽大・歯・成長発育歯
奥羽大・歯・附属病院¹)

【目的】プリアジャステッドアプライアンスによる矯正歯科治療がAngleI級不正咬合の歯列弓形状に与える影響を明らかにする。

【資料】対象には、プリアジャステッドアプライアンス(MBTTMシステム)。022スロットを用いて治療し良好な咬合状態が得られたAngleI級不正咬合者26名(非抜歯群10名, 平均年齢16歳5か月, 抜歯群16名, 平均年齢27歳11か月)を選択した。平均ALDは, 非抜歯群で上顎: $-1.3 \pm 2.5 \cdot$, 下顎: $-1.8 \pm 2.2 \cdot$, 抜歯群で上顎: $-8.2 \pm 4.4 \cdot$, 下顎: $-6.5 \pm 4.3 \cdot$ であった。口腔模型および側面頭部X線規格を研究資料とした。

【方法】口腔模型上でFApointの三次元座標値を測定し, 歯列弓形状を表すLogF値を求め, 非抜歯群と抜歯群で比較検討した。さらに側面頭部X線規格分析によって, 非抜歯群と抜歯群で治療前および治療後, 治療前後の変化量についてunpaired t-testを行った。

【結果および考察】治療前の上下歯列弓形状に非抜歯群と抜歯群で統計学的に有意な差は認められなかった。治療後において抜歯群は, 非抜歯群と比較して上顎歯列弓形状の尖形を示し, 治療前後の比較から上顎歯列弓形状の尖形化が明らかとなった。側面頭部X線規格分析の結果, 治療前で抜歯群のU1-APoが統計学的に有意に大きく, 上顎前歯が突出していたことを示していた。動的治療終了時では, L1-APoに有意な差が認められ, 非抜歯群と比較して抜歯群の下顎前歯が舌側移動し

ていた。治療前後の変化量では, U1-Apoに有意な差が認められ, 抜歯群で上顎前歯の遠心移動量が大きかった。角度計測では治療前後, 変化量とも有意な差は認められなかった。

【結論】プリアジャステッドアプライアンスは, 前歯のトルクを制御しながら上顎歯列弓形状を尖形化することが明らかとなった。

10) 平成17年度第1学年病院早期体験学習のアンケート

—歯学部学生と薬学部学生の比較—

○齋藤 高弘, 竹内 操, 釜田 朗, 森下 浩江
田代 俊男, 中島 大誠, 五月女 稔, 清野 晃孝
高橋 和裕, 天野 義和
(奥羽大・歯・附属病院薬学部病院早期体験学習班)

【目的】歯学部学生には, 歯学部学生としての目的意識を自覚させるために, 歯科医師像を早期に体験させ, 薬学部学生には, 医療に役立つ薬剤師になるために, 実際の歯科医療の現場を体験して医療人の一員としての自覚を持たせることを目的に, 歯学部附属病院早期体験学習を実施した。

【対象および方法】対象はアンケートに同意が得られた歯学部学生が78名, 薬学部学生が224名であった。歯学部学生は前期10回(5名), 後期7回(14名), 総合歯科から予診科までの7科にて診療の説明と印象採得や切削の体験などを実施した。薬学部学生は1時間30分を前半と後半の2回に分け, 2グループで計8グループ(4日), 総合歯科3・4階で診療の説明と簡単な体験および歯科健診を実施した。

【結果および考察】1) 各設問におけるU検定では, 「体験学習の内容」, 「興味・関心の度合」, 「学習成果」, 「自覚を形成」, 「先生の説明・対応」に有意がみられ, 歯学部の学生の方がよい結果であった。しかし, 「患者さんの立場で評価」には有意がなかったが, 歯学部学生の方が悪い印象を持っている者が多い傾向であった。2) Logistic回帰分析では, 有意に影響していたのは「患者さんの立場」および「将来の自覚形成」であった。従って, 歯学部附属病院学習は, 歯学部学生の目的意識の自覚, 薬学部学生の医療人としての自覚に大きく寄与していると考えられる。